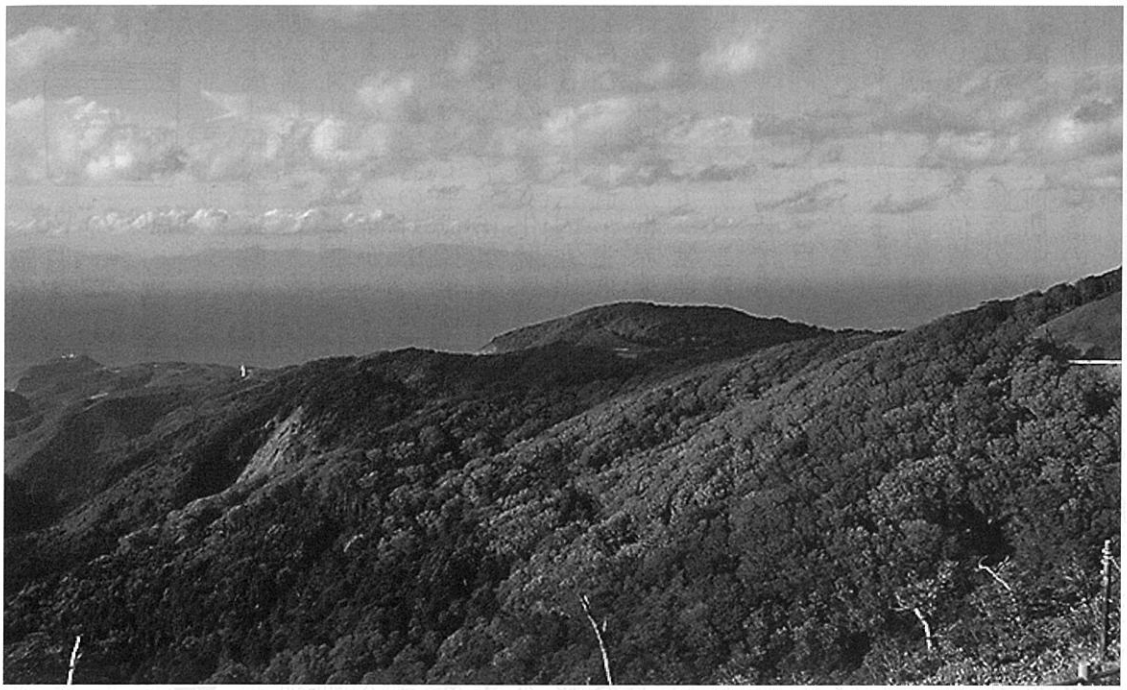
〈青森県史〉の窓 215

北海道の津軽郡

市毛　幹幸
（札幌大谷中学校高等学校　教諭）



竜泊ラインの眺瞰台から津軽海峡を挟み北海道を望む＝2009（平成21）年8月22日・筆者撮影

明治維新政府と旧幕府軍との箱館戦争終結後の1869（明治2）年7月、蝦夷地に新たな統治機関として開拓使が設置された。同年8月には、開拓使に出仕した松浦武四郎の発案により蝦夷地は北海道と改称され、国郡制を施行。北海道には渡島・後志・石狩・天塩・北見・胆振・日高・十勝・釧路・根室・千島（南千島）の11ヶ国と、それらのもとに86郡が設置された。そして、そのうちのひとつとして津軽海峡に面する北海道南西端に「津軽郡」が誕生した。

北海道渡島国津軽郡の管轄は、1869（明治2）年6月の版籍奉還により松前藩を改称した館藩から、1871（明治4）年7月の廃藩置県による館県、同年9月の弘前県、11月の青森県を経て、1872（明治5）年9月、開拓使函館支庁へと推移した。

北海道の津軽郡の誕生は、①箱館戦争の最中に箱館府知事・清水谷公考が青森に一時的に撤退したこと、②同じく、当時の松前藩主・松前徳広が弘前城下に逃れ、仮住居の薬王院で死去したこと（長勝寺に埋葬）、③北海道の南西端地域が青森県管轄となったことなど、青森県津軽地方との繋がりと結びつけてイメージされる。しかし、実際は近代日本の国制に則って誕生したのだった。

津軽郡の郡域は、旧松前城下の西在（松前城下町を起点とする和人地〈松前藩領〉西部地域）の原口村から同東在の炭焼沢村に至り、現在の松前町域にあたる。郡名は、郡域を根拠に松前郡や福山郡とすべきだが、福山の地名の起源は不明であり、松前は城下町の地名で郡域全体の名称には相応しくないとして、「昔より津軽地之渡海之地にしも有之、（中略）、今郡名となし残し置度ぞ覚ゆ」という松浦武四郎の提案による命名だった（平凡社編『北海道の地名』）。

ところで、設立当初の開拓使の北海道内直轄地はわずかに20郡だった。他は諸藩や華族・士族が分領支配していたが、廃藩置県後には、北海道本島と南千島が開拓使直轄となった。

北海道に30大区・166小区と多数の町村が創出された大小区制が導入されると、開拓使に移管された津軽郡は、1876（明治9）年9月に第11大区となり、郡内に17小区が設置され、46町村が存在した。1879（明治12）年段階の人口は18125人。主な物産として鰊・海苔・タコ・鮭・スルメ・イリコ・昆布などが挙げられる（同前）。

この後、津軽郡は1880（明治13）年1月、前年に制定された郡区町村編成法を根拠に津軽福島郡役所の所管となった。やがて、1881（明治14）年7月、津軽郡と福島郡（現知内町・福島町）の一部の区域を合併して松前郡が発足したのに伴い、津軽郡は廃止された。地域が近代化する過程で、海峡を挟んだ北海道側に、行政的な痕跡をとどめた津軽郡は、歴史の彼方に消えていった。

『東京と青森』664号
東京青森県人会、2023年8月